

Amigo Bandoneón

峰 万里恵 (うた) 齋藤 徹 (コントラバス) 高場 将美 (ギター)

オリヴィエ・マヌーリ (バンドネオン)

Marie Mine (voz) Tetsu Saitoh (contrabajo) Masami Takaba (guitarra)

Olivier Manoury (bandoneón)

1^a parte

1. スール (南) Sur

詞：オメーロ・マンシ 曲：アニーバル・トロイロ

詩人マンシはブエノスアイレス市の南部に住んでいました。長い土塀があり、突き当りの土手の向こうは鉄道線路——彼が学生時代に通った道です。この曲は、彼が40才のころ歌詞を書き、バンドネオン奏者で楽団リーダーのトロイロが作曲しました。第1部は歌詞に合わせて作曲。「スール (南) ……」とうたわれる第2部は、音楽的变化をつけるために、トロイロのメロディ先行で、それに合わせて歌詞を書いたのだそうです (1948年)。大草原と都会のはざま……近年では、スール (南) ということが、タンゴの原風景のキーワードとして使われるようになりました。

☆

古いあの街角と、いちめんの空。ポンページャ地区、あの土手に近づけば、恋人のきみの長い髪が思い出のなかに。そしてきみの名前は、さようならのことばの上に浮かんでいる。

あの鍛冶屋があった街角、泥と草原、きみの家ときみの歩道とあの掘割り。雑草とアルファルファ (牧草) の薫りが、

いまふたたび、わたしの心を満たす……。

古いあの街角——なくなってしまった空。ポンページャ地区、もっと先は水びたし。愛情でふるえていた、きみの20年、あのときわたしが盗んだキスの下で。

過ぎていったことどものノスタルジー、人生がいっしょに運んで行ってしまった砂、変わってしまった街に染みついたくらしみ、そして死んだ夢ののがさ……。

南……土塀とその先は……南……酒場の明かりひとつもう決してきみには見えないだろう、ショーウィンドーにもたれかかって、きみを待っているわたしの姿が。もう決してわたしは星たちで照らすことはないだろう、ポンページャの夜また夜、仲むつまじいわたしたちの歩みを。

場末の路たちと月たち、そしてわたしの愛ときみの窓——すべては死んでしまった。わたしには、よくわかって

いる。

2. パリに錨 (いかり) をおろして Anclao en París

詞：エンリーケ・カディーカモ 曲：ギジェルモ・バルビエーリ

1920~30年代のヨーロッパのタンゴ・ブーム！ パリに行けば素晴らしい幸運が待っている！——と、ちょっとタンゴが踊れるアルゼンチンの若いボヘミアンたちが片道切符で大西洋を渡っていきました。でも成功は来ず、帰る旅費 (当時は汽船でした) もかせげません。

この歌詞は、そんな夢破れた漂泊のロマンティストたちをたくさん見た詩人カディーカモが、スペインのバルセローナのカフェにいたとき思いついて、一気に書き上げ、フランスのニースにいた親友の (放浪していません、公演中でした) 歌手カルロス・ガルデルに送りました。作曲者はガルデルの伴奏ギタリストで、1935年にガルデルと旅行中に飛行機事故で、ともに亡くなりました。この曲は31年のものです。

☆

さすらいのボヘミアン人生に引きずられてきて、わたしはパリに錨 (いかり) をおろしてしまった。もう、身動きが取れな

い。不運に包まれ、困窮に囲まれ、わたしはこの遠い国からブエノスアイレスを思っている。大通りに面した窓から、わたしはやわらかく降ってくる雪を見つめている。死んでゆくようなトーンの赤い灯たちは、妖しいまなざしの瞳のようだ。

だれかが話してくれた、ブエノスアイレスよ、おまえは花咲く都になっているそうだね。新しく斜めの通りが2本できたとか。——どんなに、おまえを見たいことだろう。ここで金もなく、信じる心もなくし、座礁しているわたし。

遠いブエノスアイレス、おまえはどんなにすてきなことだろう！ わたしが船出してからもう10年。

このセンチメンタルな街モンマルトルで、わたしは感じる。思い出がわたしにナイフを刺し込むのを。

3. 亜麻の花

Flor de lino

詞：オメーロ・エスポーシト

曲：エクトル・スタンポーニ

このワルツがはじまると、「夜」はひとつの花で、その花びらをむしって恋占いをしているひとの姿が浮かんできます。こんな超現実主義の詩を、ポピュラー音楽の歌詞として書いたエスポーシトは、1940年代のタンゴ界に新鮮な風を吹き込んだ、革命的な作詞家でした。

スタンポーニはピアニストで、やはり1940年代を代表する作曲家。エスポーシトと同様に、ブエノスアイレス州の地方の町から首都に出て活動し、若くみずみずしい感受性でタンゴの魅力をひろげました。

☆

彼女は夜の花びらをむしっていた、キスをひとつもらうのを、むなしく待ちながら。でもわたしは夢見ていた、熱く抱きしめる春の大地の大きなキスを。——亜麻の花、なんという不思議な運命が、花ひらく亜麻の道を断ち切ってしまったのか！

彼女は夜の花びらをむしっていた、わたしがいま彼女を待っているように待ちながら、新しい服を着せられた男の子

たちみたいに恥ずかしさでいっぱい。

不在の花、あなたの思い出はいつもわたしを追いかけてくる、いつも夜の、わたしの孤独のなかを。

夜の花びらをむしっていた、わたしがいまあなたを待っているように待ちながら、町に着いたびんぼうな牛飼いのように恥ずかしさでいっぱい。

どれほどのものが去っていったことか！ そしてきょう——いつもかならず——帰ってくる、いつも夜の、わたしの孤独のなかを。

わたしは彼女が花ひらくのを見た、太陽で熟したアルゼンチンの野の亜麻のように。もしわたしが彼女のことを理解できていたなら、いまわたしの小屋には愛があるのに！ でもある日、悪魔のしわざ！ わだちの跡が彼女を連れ去った。きょう野は花ざかり……呪われたわたしには、彼女の愛がない！

4. タンゴの街

Barrio de tango

詞：オメーロ・マンシ

曲：アニーバル・トロイロ

最初にうたった『スール(南)』のおなじ作者コンビが、おなじ風景をうたった、いわば『スール』の原点といえる曲(1942年)。作詞と作曲の緊密な共同作業でつくられています。当時のブエノスアイレスのタンゴ・ファンは、こんな歌を聞きながらダンスをたのしんでいたのです。

☆

ひとかけらの街が、ブエノスアイレスの南のあたり、土手のわきで眠りこんでいる。踏切の棒でゆらゆら揺れているランプ、そして汽車が撒きちらしてゆく「さようなら」の神秘の種。

月に向かって、犬たちが声を合わせて吠える。玄関の軒下に隠されたあの愛、そして沼で小太鼓を鳴らしている、やかましい蛙たち。そして遠くに、あのバンドネオンの声。

あちらの街角では口笛のコーラス、酒場いっばいに広がるカード・ゲーム。もう二度と汽車を見に出てこなかった、あの青白い女性の、ひとつの痛み。ぬかるみの水をピチャピチャはねかす月。そして遠くに、あのバンドネオンの声。

もうなにも思い出せない古い友達、みんなどこへ行ってしまったのか？ わたしがあんなに愛していた金髪のフアナは、知っているだろうか？ 彼女を捨てたあの午後から、私が彼女を思ってくるしんでいることを。

タンゴの街——月と神秘。思い出のなかから、わたしはふたたびおまえを見ている。

5. チキリン・デ・バチン

Chiquilín de Bachín

詞：オラーシオ・フェレール

曲：アストル・ピアソーラ

《バチン》は、屋台のように庶民的なパリジャーダ(ステーキなどのグリル=網焼き)の「行列のできる店」みたいな存在でした。そこで花を売っていた、チキリンという通称の少年をうたった、実在の場所と人物による1種の寓話でしょうか。詩人でタンゴ・ファンから研究・評論家になったフェレールと、バンドネオン奏者で今日のタンゴの創造者であるピアソーラのコンビが、まだ一般には人気がなかったころの作品です(ピアソーラは有名人ではありません)。

1960年代の末、大作『ブエノスアイレスのマリア』でふたりの合作がはじまった、その最初の曲のひとつです。このワルツとおなじ時期に、あのスーパー・ヒット『ロコへのバラード』もつくりました。

峰万里恵さんは、「ふつうは犬が靴を持って行くものなのに、それを猫にしたところがスゴい」と、詩人フェレールのイメージーションに感心しています。言われてみると、そんなものですかね。

1月6日は、生まれたばかりのイエス様に、東方の3博士が贈り物をもってきた日とされます。カトリックの国では、この日に子どもたちはプレゼントをもらいます。クリスマスには、なにももらえません。

☆

夜ともなれば汚れ顔、ブルージーンの小天使、バチンの食堂でテーブルをまわってバラを売る。月がグリルの上に輝くならば、彼は月を食べ、煤(すす)のパンを食べる。

毎日が悲しみのなか、その悲しみは朝になろうとしない。とある1月6日の朝、夜明けは星を裏返しにして、彼を寝過ごさせた。そして3匹の猫博士たちが彼の靴を盗んでいった。両方とも左足の靴を！

太陽が子どもたちに学校の制服のエプロンをつけるとき、彼は学ぶ——どれほどのゼロを、これから覚えなければいけないか。そして母親のほうを見る。グルグルまわってる。ほんとうは見たくないのだ。

明け方にはいつもゴミ箱で、パンひとつとスパゲッティ

1本で、彼は凧(たこ)をひとつつくる。飛んでいくつもり、でもまだここにいる！彼は不思議な人間、千年を経た子ども。彼のなかでは紐がこんがらかったまま。

チキリン！おまえの声をひと束おくれ。そしたらわたしは売りに出る。わたしの恥ずかしさを花にして。

わたしを3輪のバラの弾丸で撃っておくれ。おまえの空腹が理解できなかったわたしの、心の重荷がほんとに痛むように。

6. わが両親の家 *La casita de mis viejos*

曲：フワン・カルロス・コビアーン

バンドネオン・ソロをおおくりします。

1920年代の末にこの曲をつくった、作者コビアーンは、ブエノスアイレスで楽団をひきいて成功していたのにニューヨークへ行ってナイトクラブのピアニストになったりする徹底的なボヘミアンでした。一生のほとんどを住所不定ですごしました。数々の、宝石のようなロマンティシズムに輝くタンゴをつくり、今日の新しい音楽家からも、愛されつづけています。

彼の故郷はアルゼンチン南部の大草原の、かなり田舎にありました。17歳くらいのとき、首都ブエノスアイレスで、プロのタンゴ・ピアニストになっています。

この曲には歌詞も付けられていますが、放蕩(ほうとう)息子の帰還をうたうのはいいとして、「老いた召使」が迎えてくれたりする内容が、タンゴ・ファンの反感を買っていません(それでも曲が美しいので、うたう人もいますが)。

ソロ演奏用に(楽器を問わず)もっとも愛されているタンゴのひとつです。

7. バンドネオン *Bandoneón*

曲：アストル・ピアソーラ

バンドネオンとコントラバスのデュオでお聴きください。

先の『スール(南)』『タンゴの街』の作者であるトロイロは、ブエノスアイレス人間のシンボルとして愛され、ながくタンゴ楽団をひきいて活動しましたが、1975年にシリーズ公演中のある夜、60才の若さで亡くなりました。

かつて、18才のころからトロイロ楽団のバンドネオン奏者として5年間すごしたピアソーラは、タンゴの大先輩で長年の友達だったトロイロの死の知らせを、当時活動の拠点にしていたローマで受けました。すぐに、トロイロの愛してい

たものをタイトルにした4曲から成る『トロイロ組曲』を作曲、録音しました。「バンドネオン」が第1曲、つづいて「シータ(トロイロの奥さんの名前)」「ウィスキー」「ギャンブル」です。

この曲は、ピアソーラがトロイロの演奏スタイルも重ね合わせてつくった、即興的なバンドネオン・ソロからはじまります。ピアソーラのCDでは、長すぎるからカットされたりした部分ですが、「千恵の輪デュオ」は、完全版で演奏いたします。



1. B.B. (ベ・ベ) *B.B.*

曲：エルネスト・バッファ & オスバルド・ベリンジェーリ

第2部は、バンドネオン・ソロからはじまります。

バッファ(バンドネオン奏者)と、ベリンジェーリ(ピアノ)は、1950年代の後半から60年代後半まで、10年間にわたってトロイロ楽団の中核メンバーとして活動しました。バッファはトロイロの代理に第1バンドネオンを弾くほどのスター・プレイヤーで、ベリンジェーリのほうは個性的・即興的な演奏のほか編曲もできる音楽家です。

ふたりはトロイロ楽団に在籍中も、独立してからも、共同

でリーダーとして、トリオやオーケストラをひきいていました。この曲は、ふたりの姓の頭文字をタイトルにした合作です。

ベリンジェーリに聞いたところ、「タンゴ界ではみんな死んでからでないと曲を捧げてもらえない。それではつまらないから、生きているうちに自分たちに捧げて作曲したんだ」と笑っていました。ふたりとも今日まだ現役で、コンビは解消しましたが、それぞれに大いに活躍しています。

2. 最後の酔い *La última curda*

詞：カトゥロ・カスティージョ

曲：アニーバル・トロイロ

この曲は、ほんとうに酔って生まれてきました。1956年のある夜、とくに理由も目的もなく、トロイロのマンションで飲んでいたら、彼が前に思いついて放っておいた4小節ほどのメロディから1曲作ろうということになりました。彼はバンドネオンを取り出し、居合わせた作詞家カスティージョの歌詞と平行して、つくったり直したりしながら、夜明けに完成しました。

☆

バンドネオンよ、わたしの心を痛めつけておくれ、おまえの荒々しい声のヤクザな呪いで。おまえの涙はラム酒、ぬかみかみか反乱を起こす場末の暗黒街へ、私を運んでゆく——人生は不条理の傷口、すべてはこんなに、はかないわたしの告白も、ただ酔っぱらっているだけ。

ほんの少しの思い出と失意が、おまえのゆっくりしたつぶやきから、したたる。

窓を閉めておくれ、ゆっくりと渦巻きになって上ってゆく夢を燃やしてしまうから。いまえにはわかれないのか、わたしが永遠に灰色の忘却の国から来たことが、アルコールのぬ項から来たことが。

おまえの受けた罰のことを話しておくれ、おまえの失敗を語っておくれ。わたしに教えておくれ、忘却の継ぎ目にこぼれてしまったあの愛のことを。

バンドネオンが震わせる古い愛。——酔いは、最後にはお芝居を終わらせる、心に緞帳(どんちょう)を下ろして。

3. 瓦屋根の古い大きな家 *Caserón de tejas*

詞：カトゥロ・カスティージョ

曲：セバステアーン・ピアーナ

第1部では、ブエノスアイレスの南部の貧しい地区をうたったタンゴが出てきましたが、この曲がうたうベルグラノー区は、対照的にブエノスアイレスの北側、お金持ちの街です。

ただし、19世紀に建った——当時はこのへんは畑や果樹園のある農村のようでした——大きな屋敷が舞台です。そこに住んでいたのは、うたっている本人とそのお姉さん、この姉妹のママと、そのお父さん(姉妹の祖父)、そしてサロンのピアノに宿っているワルツでした。

最初の短いメロディだけカスティージョが作詞作曲、そのあとはすべてピアーナ(ピアニストで音楽教授)が作曲したあとで、カスティージョが作詞しました。

☆

ベルグラノー区！瓦屋根の大きな家！お姉さん、覚えていますか？歩道にすわって過ごしたあたたかい夜々

のことを？近くを通る汽車が、めずらしい昔物語を、しとやかに立つバラの木の下に置いていってくれました。

甘い昼寝どきにおじいさんがしてくれたおとぎ話にあったように、わたしはなにかを探し求める。あのとき暗い居間のピアノは、純粋な愛情の血を、ワルツにして流していた。

よみがえってきた！ワルツがよみがえってきた！眠りこんだピアノの声のなかに、あなたの手のこまやかな魔法の力で、おじいさんの燕尾服のすそが帰って来るだろう。呼んで！呼んで！古いおとぎ話を生きましょう。あのベルグラノーの古い大きな家で、閉ざされた神秘をのりこえて、ママがわたしたちを呼んでいる。

4. ボルベール(帰郷) *Volver*

詞：アルフレード・レペーラ

曲：カルロス・ガルデル

作曲家カルロス・ガルデル(1935年に飛行機事故で没)はタンゴ歌手の最高峰です。この曲は彼の主演映画(1934年)『想いのとどく日』の挿入歌のとしてつくられました。作詞者レペーラは脚本家です。

この映画の中でもガルデルは歌手で、長く外国で活躍して、中年になって故郷ブエノスアイレスへ帰る船上で、この曲がうたわれます。

☆

わたしには見える気がする、遠くでわたしの帰り道を教えてくれている光のまたたきが。そのおなじ光がかつては、

深い痛みの時間を青白く照らしていたのだ。

人はそう望まないのに、最初の愛に帰ってゆくもの。あの古い通りで、いつか、こたえが言った、「あのひとの命はおまえのもの、あのひとの愛はおまえのもの」そのとき、あざけるように見下ろしていた星たちが、今日は冷ややかに、帰ってゆくわたしを見ている。

わたしはこわい、わたしの人生と対決しようとして帰ってくる過去と出会うのが。わたしはこわい、

数々の思い出の鎖でわたしの夢を縛りつける夜が、わたしはこわい。でも逃げてゆく旅人は、遅かれ早かれ、歩みを止める。そしてすべてを破壊する忘却が、わたしの夢を殺してしまったとしても、わたしはとても小さな希望を隠し持っている。——それが、わたしの心の全財産。

帰ってゆく……「時」の雪で銀色に染まったこめかみ。感じる……人生は風のひと吹きだと、20年は「無」にすぎないと。生きてゆく……魂は甘い思い出にしがみついたままその思い出に、ふたたびわたしは泣く。

5. ミロング *Milongue*

曲：オリヴィエ・マヌーリ

バンドネオンとコントラバスのデュオでお聴きください。

ミロングとは、アルゼンチン音楽ミロンガをフランス語化した、オリヴィエの新造語です。

1990年ごろ、彼がやっていたタンゴと即興音楽のフュージョン・グループ《タンゴネオン》で演奏するために作曲しました。

6. 想いのとどく日 *El día que me quieras*

詞：アルフレード・レペーラ

曲：カルロス・ガルデル

同名の映画の挿入歌です。この映画ではカルロス・ガルデルは、20代の若者時代から、娘のいる父親（妻は病死）という老け役まで演じて、円熟したアーティストぶりを発揮します。国民的英雄であり、ほとんど神様である彼の生い立ちについて語るのタブーになっていますが、推定では、この映画の出演時（事故死の前年）53歳でした。

ガルデルは自作によくタンゴ・カンシオン（タンゴ歌曲）という形式名をつけましたが、この曲は単にカンシオン（歌）としています。タンゴの枠を超えて、世界のポピュラー音楽として愛されるメロディをつくりたかったのです。

★

わたしの夢をやさしく撫でるあなたのためいき。あなたの軽い笑い声は、歌のように、わたしの傷をいやしてくれる。そして、すべては忘れられる。あなたがわたしを愛する日、

華やかなバラたちは、いちばん素適な色の晴れ着で飾る風に向かって鐘たちが、あなたがもうわたしのものだと言げ、あなたの愛のことを語り合う。

あなたがわたしを愛する日、この世には調和が満ち、朝の光は澄みきって、泉は楽しげに湧き出し、水晶の歌をうたう。そよ風はメロディのさざめきを運んでくる。歌い手の小鳥の声はさらに甘くなり、人生に花が咲き、痛みは存在しなくなる。

あなたがわたしを愛する夜、空の青い深みから、嫉妬ぶかい星たちが、通り過ぎるわたしたちを見ているだろう。そして神秘の光線が、あなたの髪にやどる。まるで、なんでも見たがるホタル——その光は見とどける、あなたが、わたしのなぐさめだと。

7. 酔いどれたち *Los mareados*

詞：エンリーケ・カディーカモ

曲：フワン・カルロス・コピアーン

ふたたびコピアーンの作曲で、キャバレーで麻薬におぼれている、でも純真な若い女性をヒロインにした大衆演劇の挿入歌でした。しかし20年ほど後に、バンドネオン奏者で人気楽団リーダーのアニーバル・トロイロが偶然この曲のレコードを聴いて、メロディとハーモニーの美しさに感動し、作曲者（当時ニューヨークにいた）の親友カディーカモに新しい歌詞を書かせました。この再評価がきっかけで、今日のミュージシャンがもっとも演奏したがるタンゴのひとつになっています。

★

妖しく……まるで燃えているようだった……きみは飲んでいて。そしてシャンパンのはじける音のなかで、狂おしく笑っていた、泣かないために。わたしはきみに出会ってしまったのが、つらかった。わたしには見えた、きみの両目に、電気のように熱く輝くもの——わたしが、あ

れほど愛していたきみの目に。

今夜、わたしの女友達よ、アルコールがわたしたちを酔わせた。かまうものか、人があざ笑っても、“酔いどれども”と呼ばれようとも。

いま、きみはわたしの過去に入ってゆく、わたしの人生の過去に。わたしの傷ついた魂が持ってゆく3つのもの——愛、悲しみ、痛み……。

いま、きみはわたしの過去に入る。そしていま、わたしたちは、わたしたちの道をとろう。これまで、なんと大きかったわたしたちの愛！ でもそれなのに……ああ……残ったものを見てごらん。

だれにもそれぞれの悩みがある。わたしたちには、わたしたちの悩みがある。今夜、わたしたちは飲む。なぜなら、もう二度とふたたび、会うことはないのだから。

わたしたちのタンゴに おいでくださって ありがとうございます。
またお会いできるのを 楽しみにしております。

“Amigo Bandoneón”

2008年3月23日
アップリンク・ファクトリー

出演：

峰 万里恵 (うた)

齋藤 徹 (コントラバス)

高場 将美 (ギター)

オリヴィエ・マヌーリ (バンドネオン)

企画：齋藤 徹／峰 万里恵

プログラム作成：高場 将美

今後ともよろしくお願いたします

☞ ホームページ / ブログ ☞

峰 万里恵 <http://mariemine.web.fc2.com>

齋藤 徹 <http://web.mac.com/travessia115>

Olivier Manoury <http://manoury.club.fr/index.html/index.html>

アップリンク <http://www.uplink.co.jp>
